

東洋大学短期大学紀要第29号 抜刷

1997年12月20日発行

スポーツ実況放送の 談話スタイル

－実況におけるアナウンサーと解説者の役割－

三宅和子

スポーツ実況放送の 談話スタイル

—実況におけるアナウンサーと解説者の役割—

三宅和子

はじめに

スポーツ実況放送^(注1)は、テレビの画像を見ずに音声のみを聞いて、どのような種類のスポーツ放送か分かるほど、特有の言語的特徴をもっている。その特徴は音声のみならず、語彙や文法にも現れるが、談話のレベルでも、全体の構成や進行の仕方、談話マーカ―の使われ方やターンの取り方などに特徴がみられる。本稿は、スポーツ実況放送における談話の特徴を検討する試み^(注2)の大枠のなかで、とくにアナウンサーと解説者の実況進行上の役割に注目する。日本のスポーツ実況放送には、ほとんど例外なく解説者が登場し、アナウンサーとは異なる立場で放送を進行させている。アナウンサーと解説者がそれぞれ異なった役割を分担しながら実況放送にたずさわっているのである。近年、衛星放送やケーブルテレビの発達でひとつのスポーツイベントを多言語放送で楽しめる機会が増えているが、その英語の放送には、アナウンサーと解説者が役割を明確に分担しながら実況を進めていく現象がみられない。「実況放送では解説者はどのような役割を果たしているのか」を考えることは、日本語のスポーツ実況放送の談話の特徴を考える上で、大きな示唆を与えてくれると思われる。

考察の手順としてまず、スポーツ実況放送の言語学的研究の可能性を述べ、次にスポーツ実況放送の談話としての制約を明らかにする。後半で身近なスポーツである野球、テニス、相撲の実況放送を取り上げ、その日本語版を英語版と比較しながら、アナウンサーの役割、解説者の役割、アナウンサーと解説者の相互的な役割について考察したい。

1 スポーツ実況放送の分析

スポーツ実況放送の特徴は、さまざまな言語レベルで分析が可能であり、社会言語学的見地からみれば興味深い領域だが、これまでにあまり手がつけられていないようである。

音声レベルでは、リズムやテンポ、声の高さや強さ、イントネーションの付け方などに特徴が見られ、それがまた、スポーツの種類によっても違っている。語彙レベルでは特有な専門用語や言い回しがみられる。統語レベルにも特徴がみられ、例えば野球の「ツーストライク、ナッシング」のように、名詞のみで構成された発話が多くみられたり、さかんに主語が省略されたり、「今日まで3試合を通してヒットがぜんぜんありません[選手名]」などのような名詞修飾が頻繁に使われることも特徴のひとつである。

Ferguson(1983)は、統語的な側面からスポーツアナウンサーの話し方を分析したものだが、その話し方を社会的なレジスターとしてとらえ、日本語、英語、米語の間で比較分析している。しかし、その分析は米語中心で、日本語はほとんど語彙レベルや語順の問題程度で取り上げられているに過ぎず、包括的な対照研究とはいいがたい。

スポーツ実況放送はまた、談話分析の観点から豊富な資料を提供することができる。スポーツ実況放送の談話は全体に構造的枠組みがある。まずスポーツの実況にはいる前の自己紹介や総括、競技に対する期待などのプロローグ部分があり、それにつづいて実際の競技が実況される。競技終了後にはインタビューや全体のまとめや今後の予想などのエピローグ部分があり、この全体の枠組みが明確な日本語の放送は、興味深い分析が可能である。また、語用論や発話行為の見地から解説者とアナウンサー、そして視聴者の関係を分析することも意義のあることであろう。

フレーム研究の観点からはHoyle(1993)が示唆にとむ研究をおこなっている。この研究はスポーツ実況放送ごっこをする子供の談話を分析することを通して、スポーツ実況の談話スタイルを浮き彫りにし、子供がどのようなキューを出しながら実況放送フレームのなかに入ったり出たりするかを考察したものである。

しかし、これまでの研究は、英語中心の研究であったため、英語のスポーツ実況放送のやり方に沿ってなされている。日本語のスポーツ実況放送はまず、アナウンサーと解説者の役割分担を明確にもった共同作業であることが英語と異なり、実況の重点の置き方や内容の種類も英語の放送との違いがみられる。そこで本稿では、日本語の放送をまず取り上げ、アナウンサーと解説者の役割を考えることにより、日本語の放送スタイルに即した分析を試みる。

2 スポーツ実況放送の性格

まず、スポーツ実況放送とは、どのような性格をもつ談話なのであろうか。Levinson(1979:368)はスポーツ実況を‘activity type’であるとし、話されていることとそれによってなされていることの間にかなり特殊な関係があると述べている。また、

Goffman(1981:232-234)は、実況放送の即興性に注目し、何を話すか、どのように話すかが実況者にゆだねられている点から‘fresh talk’であるとしたが、それにもかかわらず、情報の受け手（視聴者）の存在を考慮せねばならず、話す内容にかなりの制約を受けることを指摘している。これら二つの論文はともに、スポーツ実況放送が基本的には、講演やニュース報道のような準備原稿がある話し言葉とは違って、準備されていない、即興性をもつ話し言葉であることを指摘するとともに、視聴者が存在することによって、かなり特殊な制限を受けた話し言葉であることも示している。

スポーツ実況放送は、エンターテインメントの要素を強くもち、視聴者の嗜好に左右されやすい放送といえよう。全体の構成、情報の種類や有無、その提示の仕方（音声、語彙、統語法などを含む）、談話スタイルなどに、その言語社会の構成員の好みや期待が強く反映されるのである。その意味で、日本の実況放送にアナウンサーのほかに解説者が不可欠だという事実は注目するに値する。もちろん、英語圏やそのほかの文化社会においても、ふたり以上の人物がスポーツ実況を行うことは少なくないが、日本のようにアナウンサーと解説者の役割が明確に分かれているわけではないようだ。

3 アナウンサーと解説者の会話

スポーツ実況放送におけるアナウンサーと解説者の間の会話は、会話としては特殊な面をもっている。会話といっても二人のために行うものではなく、その内容を視聴者に伝えるためのものであり、自由な会話ではない。すなわち、アナウンサーと解説者は放送局や中継現場では話し手と聞き手として存在するが、テレビの前にいる視聴者なしには成り立たない存在なのである。これを情報の授受の観点からみれば、アナウンサーも解説者も情報の送り手であり、視聴者が情報の受け手となる。ともに情報の送り手ではあるが、アナウンサーと解説者は向かい合って話しているような会話形態をとる。実際には並んで受像機を見たり競技を見たりして、向き合っていないことが多いようだが、少なくとも、形の上では対面会話に近い形（頻繁なターンの交替、終助詞の多用など）で二人の会話が進み、情報が視聴者に伝えられているのである。

4 アナウンサーの役割

アナウンサーの役割はまず変化する競技の模様を視聴者に伝えることであるが、テレビの場合、ラジオとは違って、実際に起こっていることは画像に現れるため、アナウンサーの仕事はそのほかの部分に重きがおかれるようになってきている。すなわち、画面では得

られない競技者の情報を提供したり、過去から現在までの競技のデータを出したり、まわりのコンディション（天気、会場、環境など）を説明したりする役割を担う。このように、アナウンサーの発話には視聴者に向けて直接情報を伝達する種類のものと、解説者に質問をしたり確認をしたりすることを通して視聴者に間接的に情報を伝達するものがある。解説者への質問のなかにはアナウンサー自身答えが分かっているものも多い。したがって、この場合の質問はあくまでも視聴者のために情報を知らせるためのものであり、形式的には、知識が少ないアナウンサーから知識のある解説者への質問という形をとる。

5 解説者の役割

現在の日本では解説者のいないスポーツ実況放送はほとんどないが、解説者は実況放送が始まった頃から存在していたわけではない。ラジオ全盛の時代はアナウンサーのみで相撲や野球の放送が行われていた。解説者が実況放送にはじめて登場するのは、1951（昭和26）年の大阪の新日本放送（NJB）が行った野球中継からであったといわれている（橋本、1992）。NJBは名古屋の中部日本放送（CBC）と共に初の民間放送局として開局した次の日、野球中継を企画したが、NHKのアナウンサーの経験と実力に対抗するため、野球評論家を解説者として実況放送に起用し、反響を呼んだ。これが解説者付きの野球中継というスタイルの広がるきっかけをつくり、やがてテレビの普及とともに、解説者の登用はスポーツ実況放送全体に広がり定着したという。

5-1. 解説者の有無

野球実況放送はもともとアメリカから入ってきたものだが、日本の放送からは「解説者」という役割が現れて好評を博し、しだいに他のスポーツ実況にも導入され、いまでは解説者なしの実況は想像できないほどになっている。ところが、英語のスポーツ実況放送では、この「解説者」に匹敵する役割の人物がいない。スポーツの種類によって、アナウンサー以外の人物が実況に参加しているケースはあるが（とくにグループ・スポーツの場合はこれが多い）^(注3)、日本でいう「解説者」とは役割が違うのである。

この違いを明確に示すために、二言語放送された3種類のスポーツ番組での日本語版と英語版での放送要員の人員構成とその呼び名を表1にあげる。なお、調査した番組は大相撲秋場所千秋楽（1997年9月）、米メジャーリーグ・ロッキーズ対ドジャーズ戦（1997年9月）、およびウィンブルドン・テニス女子決勝戦（1996年7月）である。

表1. 日・英の放送要員構成とその呼び名

	大 相 撲	野 球	テ ニ ス
日 本 語	実況アナウンサー：2名 正面解説：2名 向正面解説：1名 東土俵、西土俵アナウンサー：各1名	実況アナウンサー：1名 解説：1名	実況アナウンサー：1名 解説：1名
英 語	Play by play：1名 Guest：1名 Report：1名	Play by play：1名	Presenter：1名 Guest：1名

日本語では「解説者」というと、どういう役割の人を指すかイメージとして分かるが、英語版では、その訳語として適切と思われる‘commentator’という役割が特別には存在しない。また、競技の進行を伝える人物もアナウンサーとは呼ばれていない。

日本語では、大相撲のように解説者がふたり以上いたり西と東の土俵の脇にリポーターを配したりする大がかりな放送もある。また、本稿の調査には含めていないが、野球やマラソン、サッカーなどのように、解説者のほかに現役選手のゲストを呼ぶこともめずらしくない。しかし、実況放送に携わる人数や種類がどのように変わろうとも、いつでも存在するのが実況アナウンサーと解説者であり、この二人がスポーツ実況放送にはなくてはならない要であることに間違いない。

いっぽう、英語の実況放送では、実況アナウンサーの役割にあたるのが、‘play by play’や‘presenter’という役割である。表からも分かるように、スポーツ実況の全体的責任は基本的にその番組の実況担当者（‘play by play’や‘presenter’）が受け持ち、必要に応じてそのスポーツに詳しい‘guest’が招かれることが多いようだ。したがって、競技について「コメント」するのも実況担当者である場合が多く、‘guest’は放送を盛り上げるために付加的に呼ばれたり、実況担当者にはない専門的な知識や選手の私的情報などを付け加えたりする立場といえよう。つまり、英語の実況放送では、日本でみられるような、アナウンサーと解説者のかけ合い（質問と解答）による実況の進行という現象がみられず、画面をみる視聴者に対して、それぞれが自分の持ち場の領域内で情報を提供しているという形態である。

5-2. 解説者に求められるもの

日本のスポーツ実況放送に解説者が欠かせない存在である以上、視聴者が解説者に期待しているものがあるはずである。以下は調査した3競技のなかで共通してみられた解説者の特質をまとめたものである。

1) 専門的知識

解説者はそのスポーツの元選手であり、日本でのトップクラスになった人たちが多い。当該スポーツの専門的知識が長い経験に裏付けられている。これはアナウンサーにも視聴者にも欠けているものである。例えば、例1ではウィンブルドン・テニスの決勝戦でアナウンサーが解説者に専門家としての試合運びの予想を聞いている（Aはアナウンサー、Bは解説者を示す。以下同様）。

例1

A：今年はどんなふうに予想されます？

B：まあ、やはり、去年と同じようになるといいますね。やはり、あの、グラフの強打を、サンチェスがどのように、ま、さばいて、先にネットを取るかという、ま、そこらへんになってくるんじゃないかといえます。

2) 経験

専門的知識と関連するが、解説者はそのスポーツの世界に生きて、さまざまな体験をした人たちである。アナウンサーは技の種類や競技者の情報には詳しくとも、競技者としての経験的な知識や内面は分からない。例えば、例2ではある力士の負け越しの原因をアナウンサーが聞いている。

例2

A：どのあたりが、出羽錦さん、負け越しの原因なんでしょうか。

B：そうですね、先場所あたりから体は太ってきたんですが、体にちょっとはりがありませんね。（中略）それがこういう成績になったんじゃないでしょうかね。

3) 内面意識の解釈

日本の実況放送にとりわけ特徴的にみられるのが競技者の内面意識をさまざまに憶測したり、予想したりすることである。解説者は、同じ競技の経験者として、自分の過去を振り返り、競技者のその場その場の内面意識を推測する。例3は元ピッチャーだった解説者にアナウンサーが、自分のチームが得点してくれないときのピッチャーの気持ちを聞いている。

例3

A：それでも1点もとれないという、ピッチャーの心理としてはどうでしょうか。

B：うーん。やっぱりね、だから、気持ち的にはガクッときますよ。

4) 評価

さまざまなレベルの評価が日本語の放送では行われる。例えば、野球でいえばピッチャーの配球の仕方、フォーム、スタミナ、監督の采配、ストラテジー、相撲でいえば、立ち合いの際の構え、気持ちの持ち方などである。例4はヒットを打たれ始めたピッチャーに対して解説者がどのような気持ちの持ち方をすべきか語っている。

例4

B: このケース、野茂は打たれちゃいけませんね。この若いバッターですからね、まだまだバッティングの技術は未熟な面がありますからね、ここは全力で向かっていかなければいけないと思いますよ。

5-3 日本語放送にないもの

いっぽう、英語放送では、日本語放送のアナウンサーの実況担当部分を‘play by play’や‘presenter’がカバーしているが、そのほかに、日本語ならば解説者がコメントするような内容も、‘play by play’がコメントすることが多い。例えば例5は相撲の武蔵丸と貴ノ浪の取り組みを‘play by play’が予想したものである。

例5

A: He'll no doubt try to raise up the right arm of Takanonami too because...

(間違いなく貴ノ浪の右腕が浮くようにもっていくでしょう。というのは…)

日本語放送にないが英語放送に強く感じられる要素としては、ウィットのきいた話し方、適度な笑い、遊び心などである。例えば、例6は野球放送で、一塁と二塁に俊足のランナーがいるのを見て、‘play by play’がピッチャーの不安を指摘した発話である(ウサギは俊足のたとえとして使われている)。

例6

A: There are a couple of rabbits out there.

(ウサギが2匹、塁に出てますからね)

6 アナウンサーと解説者のやりとり

以上みてきたように、日本のアナウンサーと解説者はそれぞれ自分の役割をわきまえながら、実況のかかなりの部分を質問とその答えというやりとりを交わしながら進めていく。この、いわば「かけ合いスタイル」がほとんどすべてのスポーツ実況中継に定着していることは、注目すべきことである。このスタイルは、その始まりとその広がり方を考えると、視聴者の好みから定着したものと思われる。日本人のどのような志向性がこのような

スタイルを定着させたのだろうか。

アナウンサーと解説者のやりとりは、あきらかに相互の役割分担意識に支えられている。また、日本人の専門家尊重・重視傾向も反映していることは、解説者を一人ならず二人以上おく番組もかなりあることから考えられる。解説者に限らず、コメントをする人間を複数用意して内容を盛り上げようとする姿勢は、さまざまな番組にみられる。日本語の談話が欧米のものに比べて、共話ともいべき相手依存性の強いものであることを考えるとき、一方的に視聴者に情報を提供するスタイルは、紋切り型になりやすく、日本人のコミュニケーションの形としてはあまり好まれないのかも知れない。

なぜこのようなスタイルが好まれるのかに対する答えは、これから2つの異なる方向からさぐっていきたいと考えている。日本語、英語の談話を詳しく分析することと、視聴者の志向、あるいはフレームを調査することからである。現時点では、南(1983)のいう「日本人の自我不確実感」を援用して、「ランク付けされた専門家の見方や言葉に安心感を求める」と考えたり、井出他(1986)の「わきまえ意識」を引用して、それが「アナウンサーと解説者の役割意識に反映したり、専門家尊重につながっている」といった考えを直ちに導くことは、避けなければならないが、何らかの形でこれらが関連しているのではないかと考えている。

今後の課題

本稿はスポーツ実況放送におけるアナウンサーと解説者の役割の焦点を当てて、その談話の特徴に迫ろうとしたものである。研究は取りかかりの端緒についたばかりで、これから手をつけなければならない課題は多い。次のステップとして、スポーツ実況放送の全体構造をみておきたい。先にも述べたように、日本の実況放送には競技の前のプロローグ的なもの、競技そのもの、競技の後のインタビューやエピローグ的なものという明確な構造がある。その構造を言語を中心に明らかにすることによって、日本語らしい談話の特徴がつかめるのではないと思われる。またスポーツ分野別に、放送の仕方、アナウンサーと解説者の役割、情報の力点の置き方など、個々の特徴をくわしくみることを考えている。比較の対象に英語を使うが、対照分析の際に留意しておきたいこととして、実況の仕方に影響を与える諸要素を以下にあげる。

1. 競技の種類の違い
2. アナウンサーや解説者の個人的な違い
3. 競技者が日本人かどうか

4. どこで競技が行われているか

5. 日本人がよく知っている競技かどうか

1. は、例えば百メートル走の実況放送とテニスの試合の実況放送とでは、競技の種類からくる実況の内容に違いが出るはずで、アナウンサーと解説者の役割も変わってくる可能性がある。ひとつの競技を取り上げて一般化することはできないことをいっている。

2. は、ひとつの実況放送のみを分析するのでは、特定のアナウンサーと解説者の特性をみている危険性があり、競技の種類は同じでも違うイベントの実況放送を見るべきだということである。

3. は、競技者が日本人であるかどうかで、アナウンサーと解説者は影響を受けるということである。例えば、オリンピックなどの国際舞台で日本人がメダルにつながる活躍をしていると、実況の内容やアナウンサーの態度や興奮度が変化することが観察されるが、これは役割分担にまで影響を与えるものであるかという疑問である。

4. は競技の舞台がどこであるかによって、実況の内容に影響を与えることが考えられるということである。例えば、イギリスで行われるテニスの試合は、日本で行われる試合に比べて伝える方もみる方も親近感や臨場感が乏しいことが考えられるが、それが実況に影響を与えるかどうかということである。

また5. は、米国で行われるメジャーリーグの野球などのように、放送担当者も視聴者も、アメリカ人に比べて情報が少ない場合、それが実況内容に影響したり、アナウンサーと解説者の役割に反映することが考えられる。例えば相撲の場合、日本の国技といわれ、日本人に親しまれているスポーツだが、日本語の放送にはアナウンサーや解説者の沈黙が比較的多い。これは、場内の日本語アナウンスを視聴者に聞かせるためであったり、画面で見た方が説明するより効果的であったり、日本人の社会文化的知識として沈黙が適している場面だったりすることによる。ところが、英語放送では、日本人よりも饒舌で、場内アナウンスには関係なく話していたり、日本人には当然分かっているようなことを説明したりしている。このようなことが、アメリカのメジャーリーグを放送する日本語放送にも起こっているわけである。

スポーツ実況放送の談話研究はその言語社会の大衆の志向が色濃く反映している点で、大変興味深い領域である。この研究を通して、日本人とは、日本人のコミュニケーションの仕方とは、という大きな課題に対するヒントが得られればと願っている。

注

- 1 ここでいうスポーツ実況放送は、とくに断わらない限りテレビの実況放送をいう。
- 2 本研究の一部は平成9年度文部省科学研究費助成研究「実況放送におけるフレームと視聴者の快・不快感との関係を探る社会言語学的研究」基盤研究(C)(I)課題番号09834010（研究代表者三宅和子）による。
- 3 アメリカ、イギリスの友人との私的書簡による。

参考文献

- 橋本一夫 1992年 日本スポーツ放送史 大修館出版
- 井出祥子ほか 1986年 日本人とアメリカ人の敬語行動 南雲堂
- 南 博 1983年 日本的自我（岩波新書241）岩波書店
- NHKアナウンサー史編集委員会編 1992 アナウンサーたちの70年 講談社
- Ferguson, Charles. 1983. Sports announcer talk: Syntactic aspects of register variation. *Language in Society* 12: 153-72.
- Goffman, Erving. 1981. Radio talk. *Forms of talk*, 197-330. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Hoyle, Susan M. 1993. Participation frameworks in sportcasting play. *Framing in discourse*, ed. by Deborah Tannen, 114-145. New York: Oxford University Press.
- Levinson, Stephen C. 1979. Activity types and language. *Linguistics* 25:33-52.
- Tannen, Deborah. 1993. What's in a frame? *Framing in discourse*, ed. by Deborah Tannen, 14-56. New York: Oxford University Press.